



「心の病」に用いられる向精神薬(抗うつ薬、抗不安薬、睡眠薬など)の数々。病に働きかけるという点では麻薬や覚醒剤と大差ない

医療ジャーナリスト

伊藤隼也が行く!

ニッポンの医療現場 第27回

問題だらけの精神医療Ⅱ 向精神薬の多剤処方が 重症患者を作り出していた!?

精神科医療の問題を指摘するシリーズ2回目は、向精神薬の問題そのものを取り上げる。たった1剤の向精神薬が多剤処方・過剰処方につながり、重い精神疾患患者を生み出している可能性があることが最近、分かってきた。今のうつ病など精神疾患の一部は、薬が作り出した「医原病」である可能性があるのだ。

薬が作り出した「偽・統合失調症」患者

前回は、精神科医が安易に向精神薬を処方する現状を取り上げたが、実は、それがきっかけで薬の種類や投与量が増え、重症の精神疾患患者が生み出されていることが、今、大きな問題となっている。

この問題に真っ向から立ち向かい、向精神薬の被害者を救済しているのが、牛久東洋クリニックの内海聡医師(前号にも登場)だ。クリニックには過剰な投薬で心も体もボロボロにされた患者やその家族が、毎月30人ほど訪ねてくる。40代の女性、Bさんもその一人だ。

Bさんが人間関係の悩みから不眠と気分の落ち込みを訴えたのは十数年前。心療内科で抗不安薬1剤を処方されたが、症状が改善するどころか、吐き気やふらつきなど新しい症状が出てくるように。心療内科医は処方を変えたり、増やしたりしたが、症状は悪化する一方だった。その後、Bさんは精神科

の専門病院に移り、治療を続けたが、次第に薬の量は増え、12種類に。

「初診のとき、Bさんは小刻みに震えて、じっとしていられない。アカシジア」という症状もありました。精神科病院の医師がBさんにつけた病名は、統合失調症。しかし内海医師は、家族の話や処方の内容からBさんは薬の影響で起こる医原性の「偽・統合失調症」であると確信した。

「減薬治療を始めましたが、



カルテには、向精神薬やその副作用に対する薬の名前がズラリと並んでいる

Bさんの場合、すでに脳が薬漬けの状態になっていたため、依存性を断ち切るのは容易ではありませんでした(内海医師)。薬を減らすことで起こる禁断症状で生じる幻覚や錯乱などに苦しみながらも治療を続けたBさん。2年あまり経ち、服用する薬は1剤に。一人暮らしを始めるほど回復した。

副作用を病気の悪化と誤診する精神科医

もちろん、向精神薬による治療がすべて悪いわけではない。薬が必要な精神疾患であれば、単剤の処方によって改善するケースもある。

だが、現実には多剤処方が行われている。厚生労働省の調査では、日本は海外に比べて多剤処方の割合が高いことが明らかになっている。その背景について内海医師はこう説明する。「抗不安薬や向精神薬などは脳に作用するので、基本的に麻薬や覚醒剤と大差なく、精神症状の副作用や依存性が生じやすい。これを精神科医は、病気の悪化

と誤診し、薬の種類や量を増やし、強い薬に変えます。その結果、脳がどんどん破壊され、さまざまな症状に苦しむことになる。多剤処方の落とし穴にはまっています」

これまで内海医師が診た患者でもっとも薬の数が多かったのは、抗不安薬のメイラックスや睡眠導入薬のハルシオンなどなんと25種類引越したそうである。

また、多剤処方の内容を見ると、脳を覚醒させる薬と鎮静させる薬を一緒に出していたり(いわゆるアクセルとブレーキを同時に踏み込むようなものだが)、抗うつ薬の副作用によるふらつきが原因なのに、貧血が原因と誤診して鉄欠乏性貧血の予防薬である鉄剤を処方していたり、医学の常識でも辻褄が合わない組み合わせが多数あったと内海医師は憤る。

さらに、多剤処方の問題は、患者の病状を悪化させる。医原病。だけにどうもならない。自殺や他害という最悪の結果を引き起こす危険性も孕む。実際、抗うつ薬のバ



内海医師はメールによる相談も有料で受け付けている(相談用メールアドレスは欄外に紹介)

キシルとゾロフトは自殺を誘発する危険性が高いため、英国では未成年者への使用に対し警告を発している。ルボックスは有名なコロンバイン高校事件との関係が疑われ、アメリカでも警告がなされている。

「ハッピードラッグ」と言って営業するMR

こうした多剤処方が平然と行われているのは、正しい処方についての医学教育がなされていないからだ。内海医師は指摘する。

「若い精神科医は、先輩が多剤投与をしていれば、それを見て正しい治療だと思ってしまう。薬は足し算するものという思考から抜け出せないのです」

内科医が抗不安薬や睡眠薬を処方できるようななった点も、多剤処方につながっている。内海医師は言う。自身も勤務医時代、こんな体験をしていた。

「当時はあまり精神科の薬について詳しくなかったのですが、ある抗うつ薬を売り込みに来た製薬メーカーのMR(医薬情報担当者)が、「先生、この薬は不安やストレスがある人に有効です。この薬はハッピードラッグですよ」と言ったんですよ」

まさに、薬が生み出す悲劇の象徴。製薬会社のマーケティングに踊らされる医師が多数でないにせよ、患者としては精神科にかかることは慎重になったほうがいいのは明らかだ。

ストレスの多い現代社会では「心の不調」は誰にでも起こる可能性がある。しかしそのすべてが病気であるとはとても言い難い。安易に薬に頼らずに、まずは日頃からオーパーワークに気をつけ、十分な休息をとることを心がけたい。それが最善の予防策だ。